平成 20 年４月１日

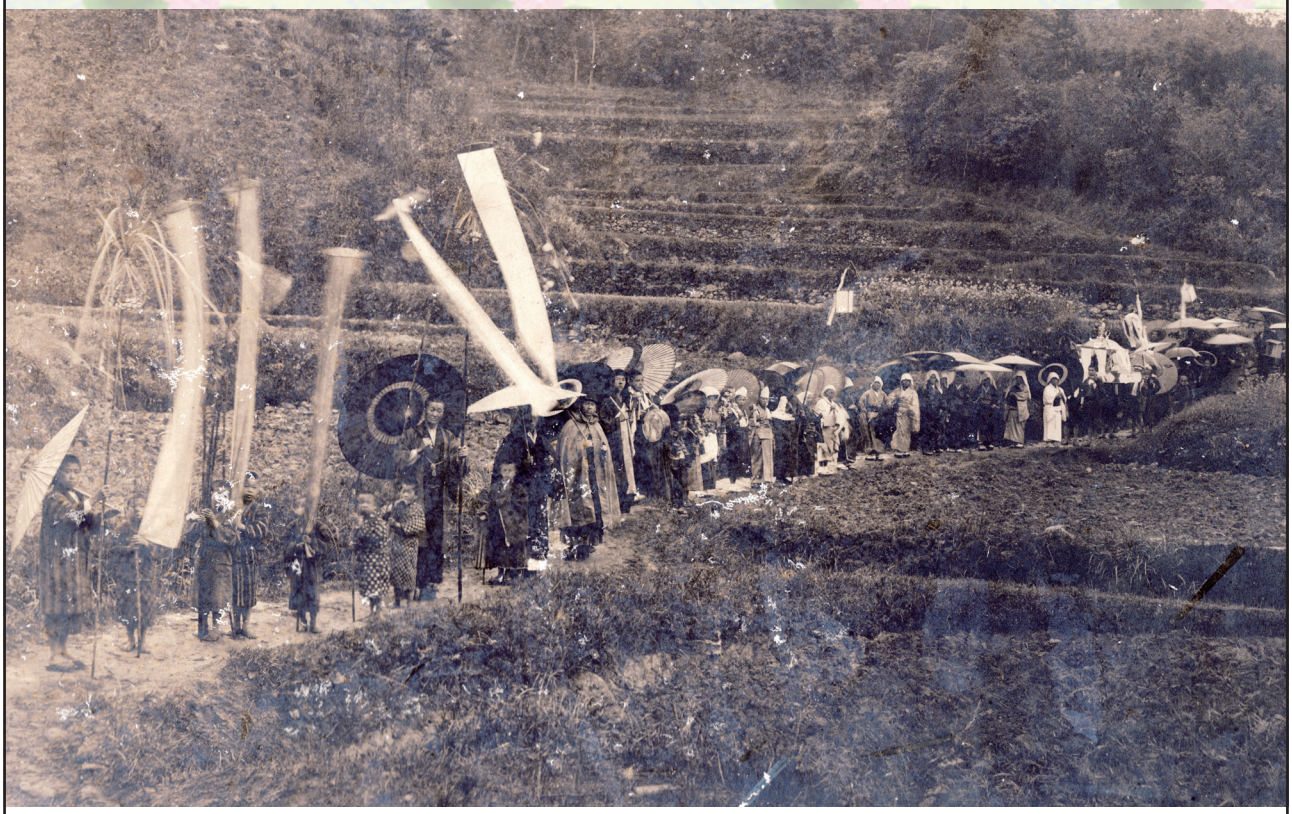
保存版

曹洞宗海晏山宛陵寺季刊紙
第 10 号／平成 20 年春

はすのは
【葬儀のしきたり特集号】

平成 20 年４月１日　　発行人　浦辺世紀
発行所　海晏山宛陵寺伝道部　〒 859-4527 松浦市今福町仏坂免 958 宛陵寺内
電話；0956-74-0139　FAX；0956-74-1170　e-mail；cent@fine.ocn.ne.jp
環境；iMac2.16GHz MacOS10.4.11　Adobe InDesign CS3

◎ご家族皆様でお読み下さい。



土葬のため、サガリ墓地に向かう葬列　～大正９年２月・88 年前～　（写真提供・永田エツ様）

龍水

世の中の変革に従い、葬儀の有りようもここ数十年で、急速に変わってしまいました。とにかく自宅で葬式をしなくなりました。因みに平成19年には宛陵寺では31軒の葬儀を勤めましたが、その内自宅葬は３軒、平成18年では42軒の内４軒しかありませんでした。12年前の平成８年では、32軒の内28軒が自宅での葬式だったのですが。

現在はほとんどの葬儀が業者の会館を使用し、もう数年もすれば100％になるかもしれません。いえば、葬祭業者の段取りに任せてしまっているということです。特にこれ以後の時代は、超高齢化社会に突入し、死亡率も上がります。反面、世代交代で葬儀の形態も急速に変化するでしょう。私のように昔は…昔は…と言ってみても通用しなくなるでしょう。

かといってだまって見ている訳にはいきません。葬儀を単なる華美な社会儀礼にするのではなく、「信仰を持った宗教儀式」に取り戻さなくてはならないと強く感じているからです（世）

「宛陵寺の、葬儀のしきたり・・・宗教的儀式として」

■枕経（示寂諷経）

宛陵寺（0956-74-0139）又は、住職携帯（090-3190-7836）へ連絡ください。
深夜の場合は、特別至急の時をのぞき、明朝にお願いします。

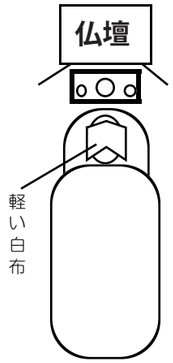
□その家の仏壇に頭をつけるように寝床を調えるのが理想です〈図 1〉まだ完全な死を迎えた訳ではありません。死に行く方の、行く末を、御本尊様・御先祖様にお見護り頂き、お導き頂くのです。私達の手のおよばぬ、大宇宙の真実へ、一歩、二歩と進み行かれるのです。

□仏間でなく座敷を使う場合は、前机 (枕飾り) を寝床の頭の真上に準備してください〈図 2〉

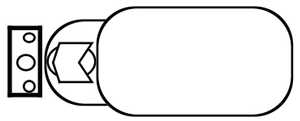
□枕飾りは、香炉・燭台・一輪挿し (水無し)・枕団子・枕飯 (一本箸)・コップ水・白布

□会館や斎場の座敷を使用する場合は、祭壇に必ず御本尊仏を奉り、祭壇に頭をまっすぐにつけて寝床を調えてください〈図 3〉

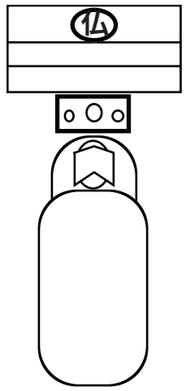
〈図1〉



〈図2〉



〈図3〉



■通夜

自宅にて、上記のまつり方のまま一夜通すのが本来です。なれど、諸般の事情で以下の通り調えてください。また別紙「通夜について」の印刷物をお読み下さい。

□通夜では、できるだけ喪服は着ません。

□納棺しても、可能な限り、蓋をキッチリ閉めないでください。

□祭壇には必ず御本尊仏 (釈迦牟尼仏) をお奉りしてください。

□通夜においては、棺を祭壇に祀らないでください。まだ完全な「ほとけ」ではありません。息の還るやもしれぬ生身の存在です。棺は祭壇の手前に、頭を御本尊仏の方にまっすぐにつけて安位します。御本尊様にお見護り頂き、お導き頂くのです〈図 4〉

□焼香はございません。弔問者は、御本尊仏に対して「南無帰依 (一切をおまかせします)」と線香を一本立て、死に行く方には「思いと言葉」をたむけます。まだ耳が聞こえるのだそうです。

□通夜での「香典」は古儀ではありません。

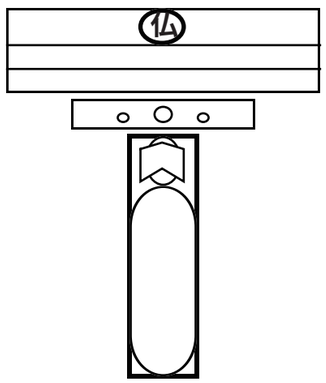
□住職による通夜のお経は、お勤めしません。よって、「通夜○時」という取り決めは致しません。
どうしても必要ならば「通夜随時」といたします。

□交代で、香・燭も絶えぬよう、見護ります。

□「通夜についての印刷物」を弔問者の目につく所に置かせていただいております。

□通夜が明けた朝、棺を横にして、遺族は喪服を着ます。

〈図4〉



■曹洞宗（禅宗）のご本尊は釈迦牟尼仏

■葬儀授戒式・葬儀告別式

□香典返しの品に「清め塩」をつける必要はありません。
仏教の真理において「死」を厄 (わざわい)、穢 (けがれ) とすることはありません。生 (出会い) と死 (別れ) をありのままに受けとめられた時、自他ともに仏心に目覚め、いただいた命への感謝報恩が湧き出ずるのであり、それから逃げては迷い畏れるばかりです。従って、死を〈清め〉ようとする「清め塩」は不要とします。（神道では用いられます）

□「授戒」とは真の仏弟子に成就し戒名を授かる儀式。本来は「生前に、儀式を修行して」戒名を戴いておくのが、正しい仏教徒の姿勢です。しかし生前に縁を戴けなかった方には、この葬儀において、遺された我々の修行をもって、回向し、成就させます。生前に授戒を修行し、戒名を戴かれておられる方の葬儀では「授戒」を略します。

□宛陵寺の葬儀は全て、経典を基にお勤めします。どうか声に出して、共にお勤め下さい。

□「引導を度す」とは仏弟子となられた方が、生から死へと滞りなく遷化なさるのを助ける事です。この言葉の力により、確かに旅立たれるのです。このことで初めて、故人は祀り拝まれる「ほとけ」としての存在になられます。

□喪主・遺族の告別焼香は、導師が案内します。まっすぐ進み、故人だけへの思いを一炉に薫じ自席に戻ります。会葬者に対していちいち一礼する必要は無いと思います。

□式後、遺族代表者が会葬者に、御礼の挨拶を致します。簡素な挨拶でも構いませんので、どうかご自身の言葉でお伝えになればと存じます。ひな形の棒読みは避けた方がよいです。

○最近思うこと。「遺族に宛てた」弔電を会葬者に紹介披露する必要があるのだろうかと？
ましてや大切な主文を削除し、肩書きと名前だけをスピーカーから連呼する必要性は？？
弔電を何かに利用しているようでなりません。
現在では弔電披露はあたりまえの事のようですが、本来のあり方を問いたいものです。
（弔電…交通の手段が未発達な時代、会葬できない方が遺族に慰めの言葉を届けたもの）

■三日参り（開蓮忌）

□基本的に収骨後、火葬場からすぐお寺にお参りいただきます。御本尊様への回向、三日回向、位牌安位回向を兼ねて勤めます。
この時、忌明までの日取りを打ち合わせいたします。

■お包みについて

□宛陵寺では、枕経、葬儀、三日参りなどの「御布施」の額について、取り決めがございません。これはあくまでも御遺族の信仰上の御心であり、お寺の方から申し上げることではないと、今のところ考えております。

□位戒料（戒名恩金）については次の通り定めております。
信士・信女など…贈位、 居士・大姉…十萬圓、 院号…三十萬圓

□仏具・法具などの寄進をされたい場合は、事前にご相談下さい。

■最後に

□すべてに於いて表現できませんでしたが、不明なことや、納得に至らないことは直接、宛陵寺住職にお尋ね下さい。

□葬儀のしきたりは、宗派や地域や寺院の考え方により趣を異にします。問い合わせを受けたことについては、信仰を持ってお答えいたします。

仏事の深意…「戒名」

「生きてるうちに戒名をもらうなんて、縁起でもない」という声をよく聞きます。「戒名は、死人の名前」という間違った考え方からそう言われるのでしょう。

仏教では十六の戒律（生き方の道しるべ）が示されます。それを理解し、護っていくと誓った人に、仏弟子（仏教徒）としての名前（ブッディスト・ネーム）を授けられました。これが戒名です。ですから、戒名は「仏教の教えを拠りどころに、迷い無く生きるための名前」なのです。

その「生きるための戒名」を葬式で授かるのは、生前に授かる縁がなかったからです。仏教の葬式は、真の仏教徒（戒名を持っている人）をお送りする儀式だからです。

宛陵寺の檀信徒の皆様へ、改めて申し上げます。生きているうちに戒名を授かりましょう。宛陵寺では、授戒式（戒名を授かる儀式）を春と秋の彼岸に執り行っております。

儀式は約二時間で、坐禅、授戒式、読経等を修行します。

▼生前授戒のよいところは、
○授戒式を受けることでお釈迦様の十六戒律（生き方の道しるべ）を知ることができる。
○仏教やお寺に興味が湧き、手を合せる機会が増える。
○自分の戒名の意味を知ることができ、そのことにより仏弟子としての自覚を持って生活できる。

▼生前授戒では、四字戒名を授かります。儀式への御布施（お気持ち）のみで、院号料などは必要ありません。

▼事前の準備が必要ですので、早めにお申し出ください。

▼次回の予定日は、9月24日（水）午前10時です。

ー編集後記ー

私達の日常生活は「自分の都合」で営んでいます。しかし、生命の生き死には、こちらの都合で操作することはできません。たとえば葬式に限って言えば〈祭壇が立派だから、お経が上手だから、会葬者が多いから、お金をかけたから…〉成仏したり、しなかったりしません。「生死は大宇宙の真実」それが「ほとけの姿」です。自分の都合を超えて、ありのままに受け止めることを「ほとけの姿」といいます。

しかし現実には、こちらの都合で営む以外にはありませんが、ただただ「ほとけの姿」に手を合わせ、南無（おまかせ）したとき、迷いを離れて救われるのかもしれません。

宛陵寺のお通夜は変わっとる、葬儀は変わっとる、とよく言われますが、真の宗教文化を護りたいだけです。そのためには「あたりまえ」を見直し、一つ一つの儀式に意味付けをしてオープンにすることからつとめてみようと思います。

私が授戒したのは（得度したのは）10歳の時です。実はあまりよく覚えていません。たぶん先代が、半ば無理矢理!?に受けさせたのではないでしょうか？私自身の意志ではなかったと思います。私の戒名（僧名）は「往月世紀」とついています。

戒名は自分でつけることができません。生まれたときの名前と同じで、授かり物なのです。（世）